

ちば里山新聞

(第68号)
編集発行 NPO法人ちば里山センター
袖ヶ浦市長浦拓2号580-148
☎ 0438-62-8895
題 字 倉島 貴浩
(ワークホーム里山の仲間たち)

令和6年度迎えてちば里山センター理事長からのご挨拶!

感謝!

会員団体におかれましては里山の整備、保全、活用にご尽力いただき感謝しております。

<これからの里山活動について>さて、みなさんの活動について先般アンケートを行いました。多数の回答が寄せられ、活動の展望及び課題が見えてきたところであります。今後は課題をどのように克服していけるか検討していきます。今更かと思いますが、里山のありべき姿について、私なりの見解を述べたいと思います。



佐藤孝之理事長

里山は地域の生活に根ざした環境の一つで単体では語れないものと考えます。生活様式



岡部塾にてナラ枯れ木伐採

が変わり、従来の生活から忘れ去られてしまったこともあるか

もしれません。そうした変化により置き去りにされてしまった里山を見かけて、保全、整備を始めた団体も多いと思います。整備の方法もそれぞれありますが、保全を優先した事と、安全技術の関係で大径木を残す方向が強かったと推察します。何処も素晴らしい森になっていますよね。

ところが、そんな里山にも、試練が訪れます。

台風の影響です。分かっていたけど後回しにしていた溝腐れ病の山武杉が犠牲になりました。途中で折れたり欠頂木になったりと、各地の里山で被害が出ました。更に、近年被害が報告されているナラ枯れ病による被害は高齢の大径木に多く見られ、処理に困っているようです。

どうしてこのようなことになるのでしょうか?

理由の一つとして、森の高齢化が考えられます。

里山は地域の生活に密接に関わる存在で、おおよそ10年程度でリセットされ、再生していました。

ところが、忘れ去られてしまい、50年も放置された森の管理は大変な労力を要しましたが、追い討ちをかける事態となっています。

そこで、これからの里山の未来を考えてみていいのではないのでしょうか?



芽かき体験

例えば、森の再生を観察、管理していくなんてどうですか。

地域の小学校と協力しながら、観察、管理することで小学校中学校を通してで9年間観察できますね。

また、空間が広くなりますので、休眠種子が発芽して、新しい発見につながることもあるかもしれませんね。

切った木の有効利用も重要です。

ひこばえからの更新・・・



椎の森で里山学習の長浦小

他にも新規会員獲得にもつながりそうですね。

これからの里山の可能性を探っていきましょう。

ちば里山センター理事長 佐藤 孝之

令和5年度より「ロープワークによる伐倒研修」を始めました！

今まではかかり木もしくは伐倒方向に不安がある木の伐倒に関しては主にチルホール等が使われていましたが、最近は持ち運びに苦勞するチルホールやワイヤーに変わって、ロープワークを使った伐倒技術が林業雑誌にも多く取り上げられ徐々に広まって来ているようです。ちば里山センター主催の岡部塾でもロープワークを駆使して巨木を伐倒しております。そんな岡部塾より少しハードルを下げて、手軽にロープワークを使用できるように会員の皆様に広めていきたいという思いで、この研修を始めました。

ロープワークによる伐倒で使用する用具としてはスローラインキット、ロープ、滑車、スリング、カラビナ、プルーシックコード、ハウススリーブ、ローププラー等です。まずは倒す木の又にスローラインを投げて、通したスローライン



ロープを上げる

の先にロープを結びつけて引き上げますがロープの保護または木の又の摩擦抵抗を減らすのにハウススリーブを使うと有効です。上げたロープは伐倒方向の木をアンカーとして、2回ねじり巻きにて固定します。もう一方のロープはやはり伐倒方向の木にV字になるよう滑車経由で取り付けます。ローププラーは伐倒木より後の安全な場所に取り付けてプルーシックコード、カラビナを介して取り付けます。プルーシックコードはロープの牽引位置を自在に変えられるので大変便利です。ロープの長さは牽引位置から3往復するので最低60mは必要です。ロープで牽引した状態での伐倒ですが受け口、追い口はロープ牽引なしで普通に伐倒する時と同じく、正確におこなう必要があります。ロープ牽引の伐倒では最初は牽引方向に傾いていきますが、

少し傾くと牽引力が無くなり、重力のまま倒れますのでツルが大事となります。伐倒完了後は、まずもってロープの回収することが大事です。倒した木の下敷きになったロープは見付けにくいのでそのまま枝払いをしていると、思わず高価なロープを切ってしまう。引っ張っても外れないロープは慎重にできるだけ遠くの位置より玉切りしてロープを救出するようにします。



滑車経由で取り付け

ロープワークによる伐倒はロープ牽引により伐倒方向が非常に安定しますので、安全で確実な伐倒が出来ます。伐倒木の重心が少し後気味になっていてもロープの牽引にて前に伐倒が可能です。安全に伐倒が出来るということで最近問題になっているナラ枯れ木の伐倒には威力を発揮します。ナラ枯れ木は辺材が腐巧しているものが多く、受け口が作りにくく、クサビも効かないのでロープ牽引により伐倒方向を安定させて伐倒します。

今回のロープワークによる伐倒研修は富津市民ふれあい公園にて、ちば里山センター主催で1月28日、3月10日、24日計3回実施し、森林・

山村多面的事業でも2月4日に1回実施している。いずれも1回あたり3名前後で全員がロープワークを学習しながら伐倒が出来ます。受講者の反応も良く、既に講習依頼の声が届いており、今年度は多くの地域で研修を進めたいと思っています。



ロープワークで使う用具



アンカーはねじり巻2回にて



ハンドウィンチは伐倒木より後の安全な場所へ

鎌ヶ谷市栗野の森見学後、第3回東葛地域里山団体意見交換会

定期的に行われている、東葛地域で活動する里山保全団体の代表者などが集まり行われている意見交流会。今回は鎌ヶ谷市で実施されました。前半は「栗野の森」の見学、後半は市役所に移動して意見交流会です。

4月15日午後1時半に新鎌ヶ谷駅に集合。寒くも暑くもない、そよそよと柔らかな風が吹き、爽やかなお天気でした。本駅は、成田スカイアクセス線、東武アーバンパークライン(東武野田線)、新京成線、北総線の4路線が乗り入れているターミナル駅で、大きなショッピングモールや個人店が連なり、比較的栄えている印象ですが、車で5分ほど行くと見えてくるのが「栗野の森の会」(以後「当会」と書きます)が森林整備をしている「栗野の森」。近くにこんな豊かな自然があることを街の人はどれくらい知っているのでしょうか。少なくとも近くに実家がある筆者は最近まで知らずにいました。



栗野の森は、観察路のある緑地、竹林、湿地などで構成されている森で5haちょっとあります。当会は、「観察路から5mを整備する」と決めて整備をされていますが、整備をし過ぎないということは、「奥まで人が立ち入りしづらい」ということで、鳥や動物の隠れ場所が出来、土も固くなりすぎないことで、土に空気が入り、植物達も元気よく伸びてくるようになります。



この日の森では、ホウチャクソウ、ジュウニヒトエ、キンラン、ヒトリシズカ、タチツボスミシ、シュンラン、セリバヒエンソウ、クサノオウなどの花々の他、鳥のさえずりも聴こえてきて、たくさんの春を感じることが出来ました。じっくり待っていると、ジョウビタキやヤマガラなどがあちらから寄ってくることもあるそうです。止まっている人間を見て「どうしたのかなー?」と思って近づいたのではないかと、当会の代表の小出さんが仰ってました。また、その場所ではコブシの花が咲く季節に甘い香りがしてくるそうです。

このように、様々な魅力が溢れる栗野の森ですが、子供達が森に触れる機会も大切にされています。各季節の生き物観察会は人気で、鳴く虫を探しに行ったり、死んだふりをする虫を観察したり、子供達にとって多くの発見があったことでしょう。他、植物観察会や、炭焼きや蔓を使った籠造りなど、自然の素材で作るクラフト体験会など、年間でたくさんの行事を行っております。

鎌ヶ谷の「栗野の森」の魅力にたくさん触れ、お腹の底から満たされた時間でした。また必ずお邪魔したいところです。

後半の意見交流会では、まず、NPO団体として活動されている団体も数組あったので、そのメリット・デメリットを伺いました。メリットは、行政に信用してもらいやすく、依頼があったり、手続きを速やかに進めていけるところがあるそうです。また、感覚的に住民とのトラブルが減ったとの報告もありました。デメリットは、決算や報告書などの事務の仕事が大変と仰っていました。そういう業務が得意なメンバーがいないと、とてもやっていけないようです。長く続けていく覚悟がないと難しいことなのだと感じました。



ハナイカダ

また、「栗野の森は何故、市が緑地を買ってくれたのか?」という問いに「運が良かった」と仰りつつも、「市役所職員の森を残そうという情熱や多大な協力が素晴らしかった」とのことでした。緑地は所有者が複雑に絡み合っていたり、それぞれに色んな想いがあったりして、購入に至るまでたくさんの苦労があったかと思えます。情熱を絶やさずいられるほど、役所で働くことは甘いことではないと私は思います。内部からも住民からも、様々な耳の痛くなる意見を聞きながら、このような結果を出してくれた職員の方や市長は、本当に素晴らしかったと私は思います。また、当会のメンバーも諦めずに対話をし続けたことと想像します。

また、市川市の森も鎌ヶ谷市の森も、一部、国道開通の為、なくなることになっています。「もう決まってしまったこと」とはいえ、悔しい気持ちを持ちつつ、「今ある森で伝えられることがある」と市川市の「森の博物館」の山越さんは仰います。先日は80人近くが参加した親子イベントを成功させております。

里やまサポーターズ WAKODO という、次世代の担い手を増やすことを目的に立ち上げられたグループでは、自然好きの住民とボランティアが繋がる為の試みとして「森の入り口カフェ」を商店街の一角で始めまし



栗野の森見学の様子

た。今は無料で飲み物を振舞ったり、森のもので作った商品(竹箒、竹炭、人形など)を置いている程度ですが、森のインフォメーションの貼り紙を作ってみるなどし、より街の人との交流が出来る取り組みをしています。

また、拠点にしている市川市は街づくりをしている方が多く、その繋がりによって森の活動を知ってもらうことが多いようです。その話を聞いて交流会では、商工会議所などの若い人が活動するグループや、子育て系のグループなどとコラボすると良いとのアドバイスがありました。

さらに、松戸の常盤平にある「常盤平団地」では、その面白い空間を活かした”ときウォーク”というツアーがあるということです。若い人～高齢の方までが賑わうその姿は、若い世代に繋いでいくという課題解決において、まさしく理想的なのかもしれません。

柏の下田の杜の吉田さんの言葉もすごく考えさせられました。「守りたい気持ちが一番大切」と仰る、吉田さん。たくさんのメディアで柏の森のことを伝えているそうですが、間口を広げるということは、それだけ「森を壊す人」(盗掘、火遊び、ゴミを捨てる等)も入ってくるということです。そんな中で下田の杜の対策として、「街灯をつけない」「ルールを伝える」ことをしているそうです。「嫌われてもいい、ダメなものはダメ」と、覚悟を決めてやっていくことの重要性をお話から感じました。

松戸の森(私有地)でも、たくさんの親子を受け入れている「ぷらっと子どもの森」というイベントが月一回ありますが、空いていない時はしっかりと柵をして、最大限侵入を防いでいるそうです。

最近、若い夫婦がたくさん入っていると話題の流山市でも、急速に森が消えているそうです。「都心から一番近い森の街」と謳っているからこそ、森に関心のある若い人たちが多く住むようになったのにどんどん減ってしまうので、若い方が中心となって活躍されているグループもあるそうです。

それを止めて、森を守っていくには、「森は大切にするもの」と当たり前に住民の多くが感じられることが必要になってくると思います。とはいえ、不用意に色んな方が来てしまうようなことにも心配はあります。これからもこのような対策と、たくさんの方に森の良さを”体感”してもらう機会をバランス良く作っていく必要があるのかもしれません。

里やまサポーターズ WAKODO 代表 葛原 まり



意見交換会の様子

多様な広葉樹苗づくりが始まりました

ちば里山センターでは、なら枯れ木伐採で生じた空間などに植栽する千葉県産広葉樹の苗木生産を目指して43種類の種子を集めました。これらの種子から苗木の育成を会員に呼び掛けたところ、15団体(26名)から41種類の樹種の種子の希望があり、5月22日(千葉市都市緑化植物園)と23日(ちば里山センター)に種子を配りました。発芽して苗木に育っていくことが楽しみです。

種子の分別に協力いただいた皆さん、お疲れさまでした。



種子を配る様子

オープンフォレスト in 松戸 vol.12 ・ 2100人超の訪問者！！

5月11日(土)から5月19日(日)の10日間、松戸市内の18ヶ所の樹林地を公開するオープンフォレスト in 松戸 vol.12 が開かれ、市民はもちろんのこと近隣の市からも森に遊びに来ました。例年をはるかに超え2100人超の訪問者がありました。

コロナ禍が明け、一斉に戸外に飛び出して春を満喫したいという気持ちと、事前に広報まつど、東京新聞、東葛まいにち、月刊新松戸などの広報、SNSで知らされたことが森のにぎわいをもたらしたのではないかと思います。

期間中天候に恵まれ、日射しの強さが目立ち始めた時季でしたが、森の中では木漏れ日が射し、穏やかな風が流れ、訪問者もゆったりとした時間が過



スライダーロープに戯れる



ダンゴムシレースに興じる兄弟

ごせたとお思います。

松戸市もかつては人びとの暮らしのすぐそばに森がありました。戦後の人口増とともに住宅団地、工業団地の進出などで樹林地、田畑が消失し、住宅地の中に樹林地がポツンと残された状態となり、近年、エネルギー革命や生活スタイルの変化に伴って管理の行き届かない樹林地が目立つようになってきました。

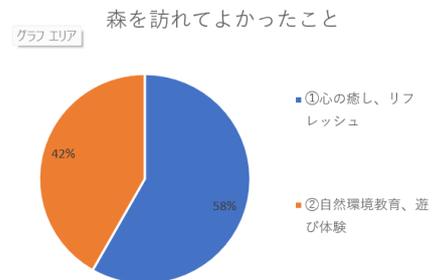
次世代にみどりを引き継ぎたいと市民、所有者、行政の3者が集う市長の諮問機関である松戸市緑推進委員会の発案で始めたのが里やまボランティア入門講座(平成15年)で、その修了生が「八ヶ崎の森」の保全活動を始めました。毎年里やまボランティア入門講座の修了生が輩出

されると、市内の樹林地保全にあたるようになりました。保全活動をするボランティアに限らずみどりを引き継ぐためには市民の理解が必要だとして平成24年に始めたのがオープンフォレストで、12回目となる今年、18ヶ所の森が公開されました。

森の中ではハンモック、木登り、大ブランコ、丸太渡り、輪投げ、ドングリパチンコ、薪割り、森探検、木工、葉っぱ工作など森にあるものを使った遊びがふんだんに用意されていました。子どもに交じって大人も嬉々として遊びに興ずる姿が見られました。

10時から15時の公開時間の間に森によっては100人を超える訪問者があり、対応に走り回るようだったと感想を述べる森の会員もいました。

訪問者から、「オープンフォレストのことは知らなかった。素晴らしい活動をしている」と聞き、森の会員たちは感激したという報告のほか、「市内に大きな森があるのは知っていたが、森に来てボランティア活動によって守られていることを学んだ。」「子どもはゲームばかりしている。自然の中で楽しんでいる様子を見てもっと森に遊びに来たい」という感想を聞き、「やるべきことがまだある」と感じた森の会員も多いとのことでした。



訪れた市民の皆さんにご意見を聞いたところ、問1「森を訪れてよかったこと」①心の癒しリフレッシュ 58.2%、②自然環境教育、遊び体験 44.8%。問2「入れる森があったら」①自然観察、散歩 96.9%、②利用しない 3.1%という結果になりました。「入りたいときに森に入れるようにしてほしい」との意見も頂戴しました。市民の提案にこたえられる樹林地保全のあり方も課題になってくる予感を感じた10日間でした。



里山じまん ⑮

いすみ薪ネットワーク

いすみ薪ネットワークの団体紹介は「ちば里山新聞」67号で詳しく述べられていますので、ここでは私たちが薪用に利用している樹木のことについて触れたいと思います。



安全講習会の様子

薪ストーブでよく使われ、好まれる樹種としてアラカシ、マテバシイ、ケヤキ、スダジイなどがあります。これらは夷隅地域の里山林に特徴的な広葉樹です。特にマテバシイの大半はかつて内房の工業地帯の緑化用に植林、栽培された人工林で、需要がなくなりそのまま放置されて成長したものが多くあり、耕地整理などで伐採され供出されています。植林した造園業者の方々から伐採を依頼され、大変良質の薪原木を大量に入手することもたびたびあります。

伐採には県林災防の安全講習を受けているメンバーで行うことにしており約 30 名います。また、屋敷林の整理も杉、ケヤキやイチョウなど巨大化した樹木の伐採も行い薪以外の用途にも利用しています。

樹木の知識を高めるための観察会や巨木調査も時々行っています。近々の活動として伐採し持ち帰ることのない杉材を活用するためのプロジェクトを進めようとしています。団体の部活動として「杉部」を設け募集したところ 20 名を越える参加者があり、今後、板材に製材したり木工加工したり生活に杉材を生かす活動をしていきます。



里山の樹木観察会

いすみ薪ネットワーク 事務局長 伊藤幹雄



つれづれごと

今回は意欲的に多くの原稿が集まり、4ページにまとめるには惜しいので、初めて中刷り追加で6ページになりました◆嬉しい限りです◆これからも読者の皆様からのいろんな原稿をお待ちしておりますので、よろしくお願いします。(Y.A)



「杉部」のモデル・伐採したスギから切り出した無垢のイス

里山の風にゆられて ⑳



ウツギ<空木>アジサイ科ウツギ属

ウツギは木の中でも珍しく、茎が中空になってることからこの名前があります。材質は非常に強くて粘りがあるので木釘にも利用される。花は清楚な白色で5月の空に映える。同じ仲間のハコネウツギはこれまたカラフルで華やかだ。

写真・文 赤松義雄 R6.5.24 袖ヶ浦市椎の森

入会申し込み・問い合わせ先

特定非営利活動法人 ちば里山センター

〒299-0265 千葉県袖ヶ浦市長浦拓 2 号 580-148 ☎0438-62-8895 FAX0438-62-8896(平日 9:00~17:00)

E-mail info@chiba-satoyama.net ホームページ <http://chiba-satoyama.net/>